

# 幼児期の深い学びの検討 探究過程の分析



# なぜ今、乳幼児期からの深い学びが求められるのか？

## 背景と前提

急激に変化する社会では、新たな知識や価値を協働して生み出すことのできる資質・能力が求められている。新学習指導要領でも「主体的・対話的で深い学び」が提案され、探究の大切さが言われている。

では、乳幼児期から大事にしたい深い学びとはどのようなものだろうか。私たちは、学びの深さは大人側が客観的に決めることができるのものではなく、一人一人の子どもが、その子どもらしく、その子どもにとって興味をもった対象と関わり深めていく過程での経験が重要と考える。



Q 研究への問い：具体的に以下の3点を考えてみる。

- 1) 年齢や期など、子どもの発達により、探究の過程はどのように変わるのか。探索 (explore) から探求、さらに探究 (inquiry) へという過程もみられるのではないだろうか。特に乳児期から幼児期へと経験がつながるためには、2歳から3歳への時期にどのような経験が大事だろうか。
- 2) 学びを深める過程として、科学的探究や気付きはよく言われる。しかし、乳幼児期の子どもたちの生活の中では、ごっこ遊びなどで役になりきること遊びが深まったり、表現を創意工夫する過程、仲間同士でルールを決めたり判断し交渉したりする過程など、人・モノ・こととの様々な関わりを経験の中に、質の異なる深まりや探究があるのではないだろうか。
- 3) 深い学びへとつながるための環境や支援として、どのような点が大事なのだろうか。一般原則よりも、具体的な文脈や状況の中での事例を深く見ていくことで、実践の深まりを見る眼の手がかりが明らかになるのではないだろうか。

本リーフレットを上記の視点から見ていただき、研修等での対話のヒントの一つになれば幸いである。

▶詳しくは本文11頁を参照

## アトリエから発見する 出会いと探求の入り口

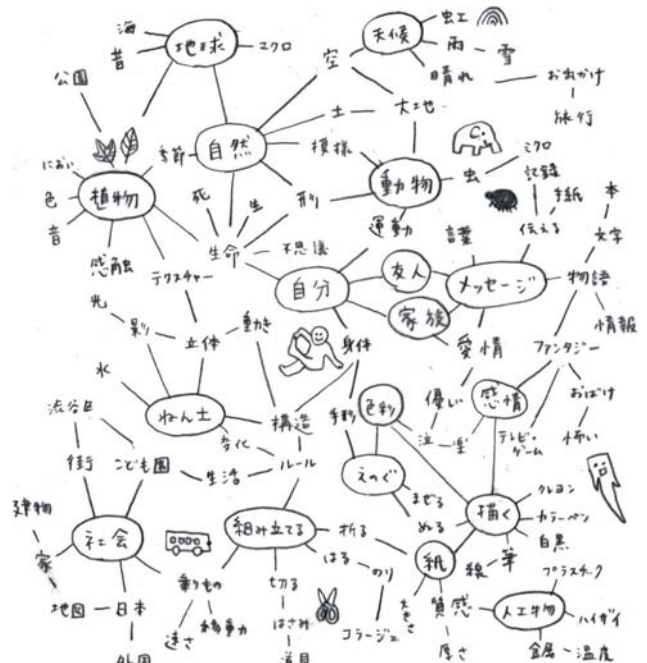
アトリエ、またはアトリエの概念とは、単に絵を描いたり、工作の技術を向上させる絵画室・造形室のことではない。子どもたちが日常の中で何かと出会い、そこで感じたこと、考えたことを手と心を使って表現し、自分や他者と対話をする精神的、物理的な場所である。アトリエにおける活動や表現を分析することから、それぞれの子どもに寄り添った「探求過程」やその視点を探っていく。



園のアトリエ

同じモノでも、それぞれの子どもによって見え方、出会う方は違う。子どもは出会いの一つ一つを自分の経験によせて、つなぎ合わせて自分なりに理解していく。それぞれの子どもなりのモノの結びつき方(リンク)があり、それによって個人個人見える世界や探求の道筋が変わっていく。

▶詳しくは本文124、126頁を参照



園のアトリエから子ども達が何と出会っているのかを分析したマップ



## 「自分で決めた遊び」を心ゆくまで楽しむ

### 2歳から3歳へ



主体的な遊び環境の中で、自分で選択し、決めて動けるようになることが0児の探究を支える基盤にある。気に入った玩具を操作し繰り返して遊ぶ経験が重要である。



気に入りの玩具「ダンプトラック」を動かしながら

クラスの子どもの多くが砂場で型抜きを楽しんでいるが、それには関心を示さない。玩具の中からしばらく迷った後ダンプトラックを手にする。その後20分間もお気に入りのダンプトラックを動かして、腹ばいになって眺めたり、四つ這いで移動させたりして心ゆくまで楽しんでいる。「カンカンカン」と言いながら、象さん滑り台を線路に見立て、自分で決めた遊びを心ゆくまで楽しむ。

▶詳しくは本文49頁を参照

## 自ら探究を行う過程の中で ～気づきや発見～

3歳半を迎えた0児。自分なりに決めることをどうしようと、友達の様子を見る姿に出会う。また、嫌なことや苦手なことにも0児なりのやり方で「やってみようかな」としている。「なりたい自分」に近付くためには、先を急がない時間、友達のモデル、刺激、自立的な生活等々が必要である。

4歳を迎えようとしている0児の「良さ」と可能性の発揮」が楽しみである。



水が顔にかかるのは嫌いでも、やってみようかな



▶詳しくは本文51頁を参照

## 何だろう おもしろそう やってみたい



洗濯ごっこ(4歳児)

新しい遊び、そして楽しそうに遊ぶ保育者の存在が魅力であり、遊びのきっかけとなっている。

洗濯ごっこの副産物としての泡。その泡に興味をもち、泡を作りたいという気持ちから遊びへの意欲や好奇心が膨らんでいる。

4歳児にとって、遊びへの興味関心と共に、安心して遊び出すための要因として保育者の存在は大きい。

### <幼児の探究を支える要因>

#### 保育者の存在(ひと)

- ・何か面白いことが始まりそうという期待感
- ・一緒に遊ぶ安心感、共感

#### 主体的に関われる環境

- ・誰でも遊びに入れる安心感、十分な量の玩具
- ・じっくりと遊べる時間・場の保障

#### 意欲のわく教材(モノ)

- ・暑い日に気持ちの良い水や泡の感触
- ・少しの難しさ、コツが分かれば簡単にできる試しや見立てができる素材、モノ

#### 遊びの面白さ

- ・見立てて遊ぶ(イメージが広げられる)
- ・試しや工夫ができる

#### 一緒に遊ぶ保育者や友達の存在

- ・面白さや楽しさを共感できる
- ・言葉や動きからの遊びの楽しさを広げる

▶詳しくは本文52頁を参照

## 模倣はオリジナルのはじまり ～友だちと同じモノを作りたい!～



空き箱を使って工作することが好きなC児。掃除機を作って遊び始める。すると、それを見ていたD児が「僕も作りたい」と、作り始める。



「同じのができたね!」(5歳児)

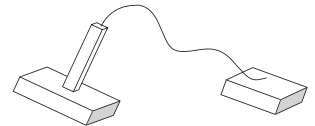


アクシデントが発生。D児の掃除機は表面しかセロテープで固定されておらず、裏面は固定されていないので、動かすと崩れてきてしまった。

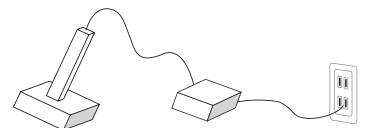


C児がより本物に近づけようと、掃除機の持ち手と本体の間をコード(ひも)で、つなげ始める。

〈C児の掃除機〉



〈D児の掃除機〉



「そうだ!コンセントにつけなきゃ」

それを見たD児が「僕もそういうふうになりたい」と、また作り始める。友だちの作っているものを羨み、模倣し、そこに自分のアイデアを取り入れてオリジナルのものを作っていく。

▶詳しくは本文82頁を参照

## 「なりたい自分に向かう時間」を保障する



じっと園庭に立っている。園庭の真ん中で動かない。いったい何をしているのだろうか。



### うまくいっていない時間

うまくいっていない時間は、失敗している時間ではない。また「失敗」は、負けて失うことでもない。やりたいこと、成し遂げたいことに気持ちを向けて、取り組んでいる時間である。「深い学びに向かっている時間」は、保育者の視点に支えられている。うまくいっていないことは、うまくいっていないからチャレンジをし続けているのだ。それは、向上の時間であって、ダメな時間でなく、いとおいしい時間である。

だからこそ、うまくいっていないように見える時間を大切にする。



### 「もっと〇〇したい」時間

「知りたい・作りたい・歌いたい・育てたい・跳びたい・描きたい・走りたい・演じたい」など。

もっとしたいことは、園生活に幅広く広がっている。

「もっと〇〇したい」という時間は、本人にとって楽しい時間であるとともに、葛藤している時間でもある。なりたい自分になろうとして、でもうまくいかない時間をしっかりと支え、挑戦をしていることそのものが本人にとって楽しく、また素晴らしいと思えるようにしてあげたい。

深い学び

↓  
探究

↓  
「もっと〇〇したい」  
状態になっている

▶詳しくは本文109頁を参照

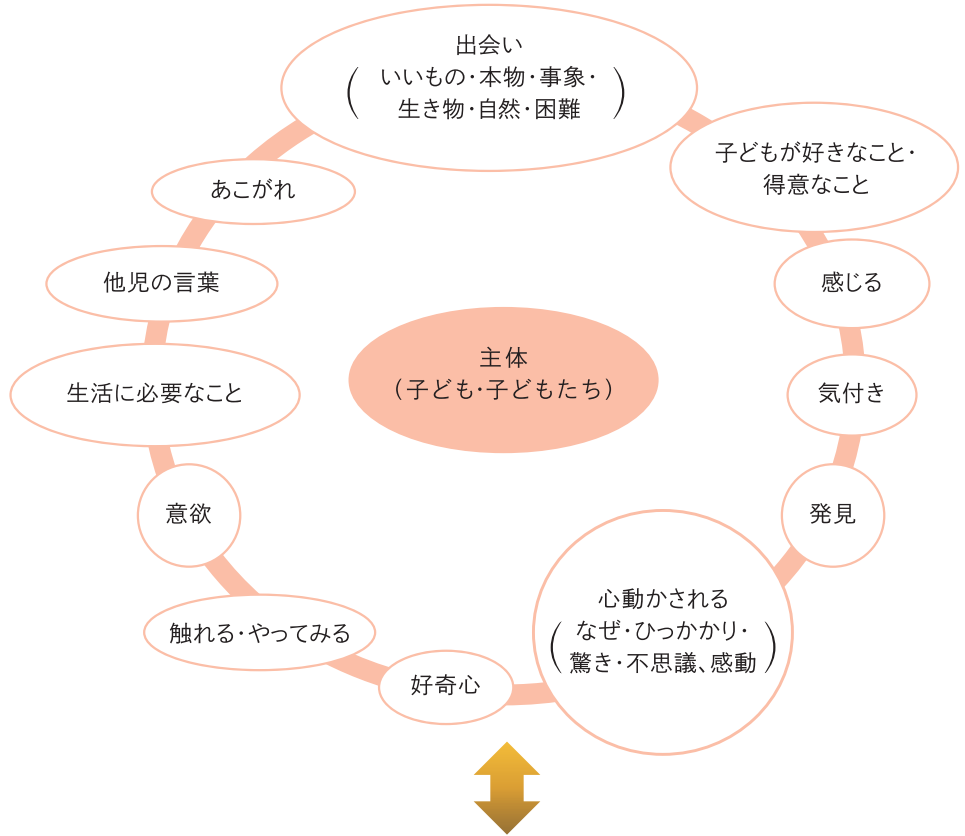


# きっかけ

保育者は子ども(たち)を主体とした探究の「きっかけ」を丁寧に捉え、関わっている。探究の過程でも新たなきっかけが生じていく。長いスパンで探究を捉え、多様な見方を意識し他の保育者とともに振り返る実践が重要である。

環境の構成(再構成)には、豊富な素材、時間や場が必要であるが、子どもの探究過程において適切に整えたり、子どもが必要とするものを捉えタイミングよく用意したり、言葉にしたりする保育者の即興性も求められる。

自由でわくわくする雰囲気、そして困難や葛藤、ネガティブな感情との出会いも、探究を生み出す。



## 探究の過程

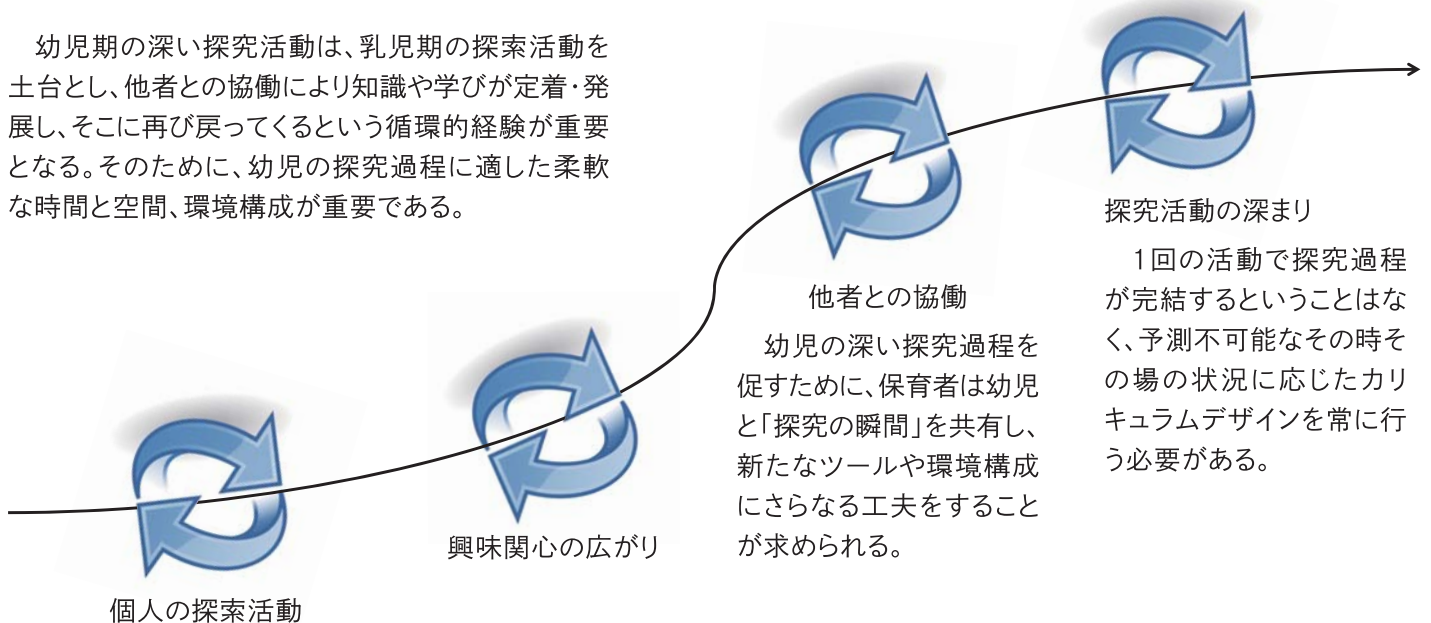
一人一人の探究過程において、子どもが求めることは変化する。変化に応じ、一人一人の良さが発揮されているか、“キラリ”を見取る保育者のまなざしが大切である。

観察	一人一人の 試行錯誤と 共有	くりかえし・ 継続	新たな 問題・困難	諦めない・ 粘り強く 取り組む	仕組みの 理解・ 思い付き	表現
見通し・ 予測・ 予想	没頭・夢中	わくわく	アイデア・ 発想	子ども同士の つながり・ 関係の深まり	関連する 体験との つながり・ 重なり	

▶詳しくは本文26頁を参照

## 探索活動から探究活動への道すじ

幼児期の深い探究活動は、乳児期の探索活動を土台とし、他者との協働により知識や学びが定着・発展し、そこに再び戻ってくるといった循環的経験が重要となる。そのために、幼児の探究過程に適した柔軟な時間と空間、環境構成が重要である。



▶詳しくは本文31頁を参照

## 子どもたちの深い学びとともに…

子どもたちの「深い学び」は、日々の保育の中のふとした場面から始まります。

子どもが「あれ?」とか「おや?」といった思いで気付いた感触、触れていて偶然見つけた不思議な物や動き、ふと思いついたこと、やってみたくなったこと、他児の物をヒントに「私なら」「ぼくなら」と考え始めたこと…等々、始まりがいろいろあります。

### ポイント

1. 「自分と異なる考え」はあっても、「誤答」はありません。このワークでは、一つの結論ではなく、多くの考えに出会えたら成功です。
2. 思ったことを話したら、お互い聞き合うのもおすすめです。

### 研修例(ワークとして)

1. 本文143頁以降の写真をミシン目にして切り取り、カードにします。
2. 3~4人で一つのグループを作ります。
3. グループのメンバーで一つの写真を見つめ、語り合います。以下の順序で語り合ってみませんか。
  - (1) この子の思いは何でしょう。この子が気付いたことは? 等々、写真から読み取ります。
  - (2) 写真から読み取ったことを話していきましょう。
  - (3) カードの表は写真、裏は話題の提案が書かれています。またメンバーで話題のテーマを設定し、加筆してみてください。



これらの写真を手がかりに様々な方々と話し合い、気づきを共有してみませんか。その後自園で写真を撮り合って、写真の子どもを見合い、それぞれが感じて考える「この子の思いは…」を話し合うのも良いかと思います。

ここでの語りは正解があるという訳ではなく、色々な見方と話しに触れて、視点を多く持つことで、日々の保育場面で広げられている「深い学び」の気づきを高める機会になります。

▶詳しくは本文142~156頁を参照

## 幼児期の深い学びの検討: 探究過程の分析

### 研究会メンバー

- 秋田喜代美(東京大学大学院教授)  
野口隆子(東京家政大学准教授)、宮田まり子(白梅学園大学准教授)  
伊藤史子(慶應義塾幼稚舎教諭)、堀田由加里(東京大学大学院院生・日本学術振興会特別研究員)  
大竹節子(元東京都教職員研修センター研修研究支援専門員)、加藤篤彦(学武蔵野東学園武蔵野東第一・第二幼稚園園長)  
和島千佳子(文京区立本駒込幼稚園副園長)、河野由紀子(第一日野すこやか園施設長・品川区立第一日野幼稚園園長)  
亀ヶ谷元讓(学亀ヶ谷学園宮前おひさまこども園副園長)、坂井祐史(学林間のぞみ幼稚園主任教諭)

公益財団法人 日本教材文化研究財団

〒162-0841 東京都新宿区払方町14-1 電話:03-5225-0255 FAX03-5225-0256 <http://www.jfecr.or.jp>